

# オーストラリア英語と辞典

— 『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』の編纂を終えて—

須 部 宗 生

## I はじめに

2011年12月に筆者が執筆者及び編集協力者として編纂に参加した『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』が多大な労苦をかけた末にようやくオセアニア出版社から刊行された。そこで今回は本辞典が世に出た機会を捉え、本小論において、オーストラリア英語の特徴とオーストラリア英語を取り巻く環境を概観した上で本辞典の特徴と意義について考察する。ところで本小論においてはその考察の範囲をニュージーランド英語を加えず単にオーストラリア英語に限定した。その理由は、ニュージーランド英語が大局的にはオーストラリア英語が基本として成立した、いわゆるオーストラリア英語の一部、もしくはその変種の一つと考えられるからである。またそのように考える根拠もある。その一つは、W. S. ラムソンの発言である。具体的には、それはその著である、『オーストラリアの英語』の第9章の結びの中での次のようなくだりである。即ち「ある程度までの相互補完を期待されていた唯一の分派であるニュージーランド英語は、オーストラリア英語からはかなりの借用はしたものの、その見返りとして殆ど何も与えなかった。」<sup>1)</sup>なのである。従って本辞典の名称に加えられているニュージーランド英語ではあるがここでは、総じてオーストラリア英語とした。ではまずオーストラリア英語の特徴を見ていく。

## II オーストラリア英語の特徴

まず初めに確認しておきたいことはここで

1) 沢田敬也 『オーストラリアの英語』オセアニア出版社 1986 p.166 ll.32~33& p.167 ll.1~2

呼ぶ「オーストラリア英語」の定義である。オーストラリア英語を広義の意味で解釈すれば単純に「オーストラリアにおいて普通にオーストラリア人によって使用されている言葉」の意味になる。しかしこの広義の意味におけるオーストラリア英語の総体の大部分は一般に使用されている英米英語とさほど異なることはなく両者は重複して使用されていると考えられる。従って、ここで扱う「オーストラリア英語」は「英米人によって話されている英語とは異なる部分を構成する、オーストラリア独特の英語」と定義したい。また次に確認しておきたいのは、I「はじめに」でも述べたように、オセアニア地域にはオーストラリアの他にニュージーランドがありそこで使用されているニュージーランド英語があり、今回の発刊した辞典でも扱われているが、基本的にはオーストラリア英語と似ており、その影響力も少ないと考えられるゆえ、ここでは便宜上オーストラリア英語に限定して論じることにしたことである。ではまず語彙面、発音面、語法・イディオム面にする特徴に関して、それぞれの全般的解説を試みた後にその具体例を挙げたい。また本章の最後に、特に筆者が本辞典の編纂作業を通して印象に残ったオーストラリア英語の特徴を如実に示した実例で、特に本辞典の日本人ユーザーにとっても興味深いと思われるものを紹介したい。またさらにもう一つ確認しておきたいことは本小論にて扱う具体例はオーストラリア英語の特徴を示すもののほんの一部であることである。当然このような具体例や用例は枚挙の暇がない程多数に及ぶ。従って、ここで列挙する用例の各々の背後には類似例が何百、いや何千となく存在すると理解されたい。

## II-1 語彙面の特徴

オーストラリア英語とイギリス英語の類似は大きい。即ち、使用されるオーストラリア英語の語彙の多くはイギリスでは実際に使われている。このことはオーストラリアの移民の歴史におけるイギリス人が与えた大きな影響を考えれば当然のことと思われる。またオーストラリア英語語彙の一部はアメリカでも使われている。しかしここではイギリスでもアメリカでも使用されていず、特にオーストラリア的な語彙に限って実例を挙げてみることにする。この点に着目して、横瀬はその著書の中で、mallee (多くの種類に及ぶユーカリの木)<sup>2)</sup>を紹介している。因みに本辞典はこの単語を使用する表現を3つ掲載している。それらは、fit as a mallee bull (全くぴったりしている)、strong as a mallee bull (非常に強い)、take to the mallee (どこかに行ってしまう；奥地に逃げる)である。いずれもオーストラリア的な語彙の代表的な存在のようである。また川野もその著書の中で、Anzac Day (第二次世界大戦の記念日)<sup>3)</sup>などを紹介している。またオーストラリア独自で使用されていると考えられる日常語として、footpath (歩道の意味で、アメリカでは普通sidewalk、イギリスではpavementと呼ぶ)やpawpaw、(パパイヤの意味で、アメリカでもイギリスでも普通papayaと呼ぶ)、station (牧場の意味で、アメリカでは普通ranchイギリスではfarmと呼ぶ)なども挙げている。では以上のような一口にオーストラリアだけで使用される語彙、いわゆるオーストラリア英語の特徴的な語彙とはどんなものがありうるであろうか。この間に対して考察してみるとその特徴が大きく次の3つの範疇に当てはまると考えられる。即ち、1) オーストラリア特有の自然・風物・動植物に関係する語彙、2) オーストラリア特有の習慣・文化に関係する語彙、3) アボリジニー語に由来する語彙である。即ち、オーストラリア

英語の語彙には、オーストラリアは南半球に位置する大きな大陸であり他の地域とは大きく異なる自然環境にあり、独自の文化と歴史がある事実が大きく関係していると考えられるのである。さらにまたオーストラリア英語を考える際にはオーストラリア英語に対するアボリジニー語の影響なくしては語れない事は沢田の翻訳書『オーストラリアのことば』<sup>4)</sup>でも明らかである。では以下にそれぞれの範疇別に分けて具体例をみでみる。

範疇1：オーストラリア特有の自然・風物・動植物に関係すると思われる語彙

billabong (分流、雨季だけの川床)  
corroboree (祭り、踊り)  
jumbag (羊)  
bettong (鼻の短いネズミカンガルー)  
jarrah (ユーカリの一種で、ジャラの木)等。

範疇2：オーストラリア特有の習慣・文化に関係すると思われる語彙

smallgoods (ハム、ソーセージ、ベーコンサラミの類)  
squatter (牧場借用人、大規模牧場経営者)  
jackaroo (牧場の若い見習い)  
fossick (他人の採鉱地を盗掘する)等。

範疇3：アボリジニー語に由来すると思われる語彙

gunyah (アボリジニーの小屋)  
nulla nulla (堅木の棍棒)  
myall (野蛮なアボリジニー)、  
Baal (不承知の表現)「いいえ」等。

## II-2 発音面の特徴

まず発音面でのオーストラリア英語の特徴に関して森本は著書の中で、次の3つを紹介している。即ち1) Cultivated Australian

2) 横瀬弘幸 『オーストラリアおもしろ英語辞典』皆美社 1994 p.106 1.8

3) 川野 寛 『オーストラリアの取説』リント 2010 p.6 1.5

4) A.G.Mitchell & Arthur Delbridge *The Pronunciation of English in Australia* Angus and Robertson Ltd. 1965 p.147

(イギリスの標準音RP (Received Pronunciation) にかかなり近く、品格ある発音とみなされるもの)、2) General Australian (ロンドンで聞かれる一般市民の英語に近いもの)、3) Broad Australian (オーストラリア訛りのもっとも強いもの)である<sup>5)</sup>としている。また同氏はこれらの区分は「個人の習慣的選択 (habitual choice) によるものであり、地理的・社会階層的なものではなく、したがって同じ町のどの場所にも、同じ学校でも極端な場合同一家族の中にも、この3つが存在すると主張する。またそれらは画然と区別されるものでもなく、その境界が色のスペクトルのように連続しているので、Spectrum of Australian English とも呼ばれる。<sup>6)</sup>としている。それ故オーストラリア英語の発音面の特徴と一口に言っても実に複雑な様相を呈している。しかしここでは便宜上最もオーストラリア的な特徴といえる、Broad Australianに絞り発音上の特徴を母音と子音に分けてみることにする。

母音：

- [i]が[eɪ]または[ai]となる。例：twenty [twentɛɪ]、courtesyが[kə:təsɛɪ]となる。
- [i:]が[əɪ]となる。例：sweets [sweɪts]となる。
- [u:]が[əʊ]となる。例：boot [bʊt]となる。
- [eɪ]が[ai]となる。例：cake [kaɪk]となる。
- [əʊ]が[ʌu]となる。例：go [gʌu]となる。
- [ai]が[oi]となる。例：try [trɔɪ]となる。
- [au]が[æu]となる。例：power [pæuə]となる。
- [ou]が[ʌu]となる。例：hope [hʌp]となる。

子音：

- [l]の音が聞き取りにくい。例：although [əðəʊ]、all right [ɔraɪt]となる。
- 摩擦音[ʒ]、破擦音[dʒ]はしばしば口蓋音化する。例：spinach [spɪnɪtʃ]となる。

5) 森本 勉 『入門オージー・イングリッシュ』研究社 1986 p.3 ll.12~14

6) “ p.5 ll.6~7

## II-3 語法・イディオム面の特徴

残念なことにやや短絡的に発音上の特徴だけがオーストラリア英語の最大の特徴のように注目されがちである。このような傾向は例えば、“When did you come to this hospital?” (いつこの病院に来たのか)との質問にあるオーストラリア人が“I came here today.”(今日来たんだ)と答えたのだが、彼の発音上の特徴から“I came here to die.”(死ぬためにここに来たのさ。)と聞こえてびっくりした、などとの話が面白おかしく語られることにも影響されていると思われる。しかし森本はオーストラリア英語の最大の特徴はイディオムにある<sup>7)</sup>としており、「今日のオーストラリア英語への発展は移民のごく初期に始まっていたといつてよい。その後やって来た移民たちも、new chum (新参者)として軽蔑・差別されるのを極度に恐れ、すでに行われていた (sic) 独特の語法や語彙を懸命に吸収しようとした<sup>8)</sup>と語り、さらにスラング的なイディオムや語法が「19世紀の末ごろから20世紀の初頭にかけての愛国的風潮から、文学作品にも盛んに用いられるようになり、第二次世界大戦以前までにはイギリス英語とは違ったオーストラリア独特のイディオムが確立されるに至った<sup>9)</sup>と主張している。また早坂はその著作の中でオーストラリア的なイディオム表現として、fair dinkum (真正正銘)<sup>10)</sup>やgo bush (蒸発する、雲隠れする)<sup>11)</sup>を紹介している。また横瀬はその著作の中でオーストラリア的な挨拶表現として、How are you standing up to it? (どう、うまくいっているかい)<sup>12)</sup>やShe is apples. (万事うまくいくさ)<sup>13)</sup>を紹介している。

また語法的な特徴を示すものとして挙げられ

7) 森本 勉 『入門オージー・イングリッシュ』研究社 1986 p.8 l.4

8) “ p.8 l.23~p.9 l.4

9) “ p.9 ll.7~10

10) 早坂 信 『一杯のオーストラリア英語』NHK出版 2000 p.11 l.1

11) “ p.19 l.1

12) 横瀬弘幸 『オーストラリアおもしろ英語辞典』皆美社 1994 p.6 l.19

13) “ p.7 l.10

ば数に限りはないが、以下の4つを加えておきたい。

- be different to～「～と異なる」：イギリス英語ではbe different from～、アメリカ英語ではbe different than～などとなる。
- As well…などが文頭に来て意味は「更に…」である。：これはイギリス英語やアメリカ英語では見られない特徴であり、この場合英米語では文頭にAlsoやMoreoverが来る。
- 文尾にbut を置いて「…だけれどね」などの意味で使う。例えば、「今日は雨降りだね、涼しくて気持ちがいいけどね。」などは、It is rainy today; cool and nice, but. などとなる。
- you の複数形として語尾にs または seをつけて yous(e)を使う。例えば、「君たちはどの国を訪問するつもりなのですか。」を Which countries are yous(e) going to visit?などと言う。

#### II-4 日本人が誤解し易いオーストラリア英語

では最後に本辞典の編纂作業で筆者にとって最も印象的と感じられたものの中で、かつオーストラリア英語の典型的な特徴を有し、さらに日本人にはかなり誤解し易いものを10個ばかり以下に補足的に挙げてみる。便宜上「オーストラリア英語クイズ」と題して○×形式の出題とし、後で正答を明らかにした上でその解説を加えることとする。因みにこれは筆者が平成24年4月22日に静岡大学で行われた、第25回異文化情報ネクサス研究会(CINEX)定例研究会で口頭発表した内容を基にしていて、一部は筆者の担当する基礎ゼミ講座の中でも紹介したものである。

「オーストラリア英語クイズ」

次の説明は本当、うそ、どちらですか。○×で答えてください。

- Q1 オーストラリア英語の He married a bloody young girl. の意味は「彼は冷酷な若い女性と結婚した」である。  
( )

- Q2 オーストラリア英語の It's ripper! の意味は「見事だよ、立派だよ」である。  
( )
- Q3 オーストラリア英語の quack の意味は「やぶ医者」である。  
( )
- Q4 オーストラリア英語では fry pan は正式な英語である。  
( )
- Q5 オーストラリア英語では have a shower とは言わず、take a shower と言う。  
( )
- Q6 オーストラリア英語では セーターのことをjacket と言う。  
( )
- Q7 オーストラリア英語では ヴィクトリア州の人たちをMexicanと呼ぶ。( )
- Q8 オーストラリア英語では オーストラリア人は自分の国のことをDown-under (地球の裏側)と呼ぶ。  
( )
- Q9 オーストラリア英語では loo は「トイレのことだがrooと言えば「カンガルー」のことである。  
( )
- Q10 オーストラリア英語では 酒場で Who's shouting?と言えば「誰だ、酔っ払って騒いでいるのは」という意味である。  
( )
- では正答であるが、Q1× Q2○  
Q3× Q4○ Q5× Q6× Q7○  
Q8○ Q9○ Q10× となる。  
では以下解説である。
- Q1 : bloodyはこの場合、「血なまぐさい、冷酷な」の意味で使われるのではなく、一種の強調のため使われる“very”の意味である。従って「彼はとても若い女性と結婚した」の意味である。
- Q2 : ripperは「切り裂き魔」などの恐ろしい意味ではない。「立派だ」という日本語の意味と音の両方が酷似している。
- Q3 : quackは英米語では「やぶ医者」を意味する場合が主流だがオーストラリアでは普通のdoctorの意味で使われる。
- Q4 : fry panはオーストラリア英語では立派な標準的英語である。英語では和製英語の問題がしばしば取り沙汰されており、「フライパン」の正しい英語はfrying panであるから注意するよう

- にとよく学生にも紹介するが、オーストラリアではfry panが標準形である。
- Q 5 : 「シャワーを浴びる」は英米ではtake a shower というのが標準であるが、オーストラリアではhave a shower という。
- Q 6 : 「セーター」のことはオーストラリア人の多くはjumperと呼ぶようであり、筆者も思わぬ誤解した経験がある。
- Q 7 : 特にニューサウスウェールズ州人たちが、そこから見て州境の南にあるヴィクトリアに住む、ヴィクトリア人のことをこのように呼ぶとのことである。<sup>14)</sup>
- Q 8 : このよう表現は北半球に住むものが多少オーストラリアに対して嘲りの気持ちを込めて使う表現だと誤解している人もいようであるが、オーストラリア人自身が使用している。
- Q 9 : オーストラリア英語の特徴の一つに言葉を短く略すことが挙げられるがこれはその典型的な例であろう。因みに他には、arvo (afternoon) や cuppa (cup of coffee) などがある。
- Q 10 : この表現を始めて聞いた人は必ず意味を誤解するはずである。オーストラリア英語のshoutには「酒を人に奢る」の意味がある。

### Ⅲ オーストラリア英語を取り巻く環境の変化 —オーストラリア英語の地位の向上・深まる日豪関係—

日本の英語教育においてこれまで取り扱われてきた英語は英米のものが中心であったことは否定できない。この意味で日本の英語教育におけるオーストラリア英語の地位は高いとは言えなかった。この傾向は日本のみならず世界の多くの地域における外国語としての英語教育にも当てはまっていたようだ。しかしながら、最近オーストラリア英語に対する世界の認識が次第に変化してきたことも事実である。これにはオーストラリアという国を

めぐる、内的小および外的な変化という要因が影響しているだろう。例えば内的小な要因としてはオーストラリアが採ったオーストラリアの白豪主義からの脱却に基づくと思われる、日本語教育を含めたLOTE政策と呼ばれる<sup>15)</sup>積極的な外国語教育制度の導入などであろう。さらにはまたまた外的な要因としては、世界全体のITによる情報化とグローバル化の流れの中で、英語という言語自体グローバルコミュニケーションを図る生きた国際言語であるという共通理解の下で実際に使用されている英語の多様性を認めていこうという考え方が主流になってきたためと考えられる。即ちイギリス英語が正統なものであるとか、アメリカ英語が正しい英語であるとする考え方からの脱却である。そしてその一つの証拠として近年受験者が増加しており英語運用能力を計る英語試験として不動の地位を確立しつつあるTOEICテストにおいても、2006年5月からは内容及び形式が一新され新TOEICテストとなった事実もある。即ち、「使用される音声にアメリカ、イギリス、カナダの英語に「オーストラリア（ニュージーランドを含む）の発音がそれぞれ25パーセントの割合になるように含まれることになった。」<sup>16)</sup>またさらに今後もこのようなオーストラリア英語に対する認識と評価とその必要性がさらに高まると予想される。その背景には例えばオーストラリアを舞台にした映画『クロコダイル・ダンディ』『ミッション・インポッシブル』などをきっかけとしたオーストラリアという国自体に対する人気や存在意義の高まりが基本的にあるだろう。さらに日本にとってもオーストラリアの経済・貿易面での存在意義はさらに増大しつつある。またオーストラリア側にも日本は無視できない国であるという考え方があったようだ。それが農業大国としての宿命的な輸出入拡大政策や第2次世界大戦による日本との関係悪化からの脱却政策に結びついたと考えられる。特に最近取り沙汰され

15) 長谷川瑞穂 『はじめての英語学』 研究社 2006 p.193 1.4

16) 赤井田拓弥 『新TOEICテスト米・英・豪・加』 比較リスニング 2007 アルクp.4 11.4~8

14) 沢田敬也 『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』 オセアニア出版社 2011 p.420

ている、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）構想などの影響から近年日豪関係がますます強化されてきている。またBSE問題の出現で米国産ビーフより安全なオージービーフの人気の高まったことも追い風となったようだ。また深まる日豪関係を考える上で注目したい点は、日本とオーストラリア両国は太平洋でつながっており地理的な位置の関係上時差が少ないという事実である。この単純な事実が、テレビ会議システムなどを使用しているリアルタイムでのコミュニケーションを行うために有利に働くと考えられるのである。このように考えたきっかけは筆者自らの実体験であった。と言うのは、2011年の春に筆者は韓国の高等学校の英語の授業を視察訪問したのだが、そこで教育活動の一環として、韓国の生徒たちによって行われていた、オーストラリアの姉妹校の生徒たちとリアルタイムで行っていたテレビ会議を参観する機会を持ったことである。もちろん一定のメッセージを単に送るためだったら電子メールが時差を克服した便利なデジタルメディアと言えるだろう。しかしその場で相手の表情を視覚的に確認しながら行えるフェイスツーフェイスによる双方向コミュニケーションが可能なテレビ会議やテレビ授業には電子メールはとうていかなうはずもなく、電子メールにはテレビ会議やテレビ授業がもたらす迫力や臨場感はない。要は、日本と時差が少ないオーストラリアは日本を含むアジア諸国の英語学習にとって最適な国であると考えられるのである。また時差の少ない日本とオーストラリアはビジネスやその他の活動のためにもテレビ会議をやりやすい環境にあることは明らかである。また、日豪関係は政治、外交、防衛など様々な面で強化されつつあるようである。2012年5月25日付の読売新聞では沖縄で開かれる6回目の「太平洋・島サミット」で日米豪が対中国への牽制を強めつつあることを報じている。<sup>17)</sup> このように内的・外的な環境の中で今後オーストラリア英語に対する関心の高まりと共にオーストラリア英語も取り入れた形で

の英語教育の言語材料がさらに評価されつつある。このような中結果として今まで日本の英語教育において影の薄かったと言えるオーストラリア英語の地位も今後ますます高まると期待される。

#### IV 『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』の特徴と意義

##### —その希少性と絶妙な発刊のタイミング—

本辞典の特徴と意義を考えるに先立ってまず確認しておきたいのは、本辞典のようにオーストラリア英語を扱った辞典の少なさ即ち希少性である。故に本辞典の特徴と意義はコインの両面のように表裏一体でありこれらの2つを分けて論じることはできない。前章でも確認したように、日本以外の国々においても、オーストラリア英語そのものに対する認知度が低いという環境の中で多くの英語辞典が取り扱ってきた言語データベースも英米を中心とする英語であった。日本でも英語教育において扱われる言語材料は英米語中心のものであり、その結果日本国内で出版される英語辞典も然りであった。尤も筆者が編集に参加した『新編英語活用大辞典』（研究社・1995）においては、オーストラリア語法も加えていかななくてはいけないという反省からオーストラリア英語のデータベースを使用したりオーストラリア人を編集者に加えた事実もあるにはあった。しかしこのような動きは未だ少なく、発展する日豪関係の中にあっても大半の英和辞典の扱うデータは英米語が主流であり、現在の時点で日本国内においてオーストラリア英語に特化している辞典はざっと3点を数えるに過ぎない。具体的には、『オーストラリア・ニュージーランド英語辞典』沢田敬也 オセアニア出版社 1987、『新オーストラリア・ニュージーランド英語中辞典』沢田敬也 オセアニア出版社 2001、『オーストラリア英語中辞典』、森本勉 大修館書店 1994だけである。しかもこれらの3点も小型や中型の辞典に過ぎず、確認したように次第に高まるオーストラリアの存在感と深まる日豪関係を背景にして、大辞典クラスのオーストラリア英語辞典に対する需要が徐々に生まれていっ

17) 読売新聞 (2012年5月25日付)

たと考えられる。今回そのような世の要請に対して、タイムリーかつ絶妙なタイミングで応えたのが今回出版された本辞典『オーストラリア・ニューゼaland英語文化大辞典』ということができるだろう。

当然本辞典の特徴としてはその名が示すように、まず大辞典であることが挙げられる。筆者を含む、大学教員を中心とする執筆者は総勢50数名を数え収録語彙数は約2万3千になった。本辞典の構想自体がスタートしたのはその編集主幹の沢田敬也氏によると25年ほど前だそうである。本辞典は大辞典である故、当然編集に要するエネルギーと時間的負担も大きく、完成を見るまで10数年の長きを要した。しかしここで注目すべき本辞典のもう一つの特徴としては、収録語彙数が他の大辞典クラス英和辞典のものと比較して格段に少ない点である。しかしながら収録語彙数の少なさは決して本辞典の価値を減じるものではない。そのわけは、オーストラリア英語自体の大部分が英米語のものと重複しており、従ってオーストラリア英語辞典の宿命として、その収録語彙を英米語と異なる部分、即ち特にオーストラリア的な英語に限定されるからである。必然的に、英米語と重なる部分に関しては、利用者にはすでに世に出ている英和辞典を参照してもらうこととなる。因みに日本で発刊されている大型英和辞典のうち、単独の大辞典としては最大と思われる『小学館ランダムハウス英和大辞典』の収録語彙数は34万5千、研究社の『大英和辞典』の収録語彙数は26万、『リーダーズ英和(第3版)』と『リーダーズ・プラス』の合体版が47万。大修館の『ジーニアス英和大辞典』は25万5千である。しかし本辞典には語彙の説明を中心にしたこのような普通の英和辞典とは存在目的も異なり、当然異なる編集方法が採用されたと言える。また、当初考えていた以上の時間がかかった大きな理由としては、筆者の知る限り、編集主幹の健康上の理由もさることながら、(さらにこのこと自体本辞典編集の激務を物語るものであろうと思われるがそれは別としても) 前述のように、これまで日本には、本辞典のようなニューゼalandを含

むオーストラリア英語に特化した辞典は数が少なく、さらにあっても収録語彙の少ない中辞典クラスのものだけであったので、今回は今までにはない大辞典を目指した関係上、それらの中辞典は参考にもならず、ほぼゼロからの出発であったことがあると考えられる。また今までの中型辞典のものとは編集方針を大きく変更したことも出版まで長期に亘った理由でもある。この新しい編集方針に則った本辞典の特徴に本辞典の存在価値があると思われるのだが、それはいかなるものであろうか。それらをざっと列举すれば、1) 収録語彙の単なる表面的な意味の列举に留まらず、オーストラリア・ニューゼalandの歴史、文化、慣習などに踏み込んだ説明を加えたこと、2) 図表、統計、写真などを豊富に掲載したこと、3) 動植物など、オーストラリア・ニューゼaland特有の風土・自然などに密着した語彙を豊富に収録したこと、4) 狩猟民アボリジニーの言語に由来する語彙を豊富に収録したこと、5) オーストラリア大陸の先住民、マオリ族の言語に由来する語彙を増やしたこと、などが挙げられる。従って大辞典クラスとしては比較的少な目の収録語彙数ではあるが本辞典にはそれを補う特徴と利点があると考えられる。

## V オーストラリア辞典編集の将来的課題と展望

以上見てきたように、今回の本辞典は確かに日本において出版された最初のオーストラリア英語に特化した大型辞典であること自体に大きな意義があり、長所もある。即ちその長所はオーストラリアの歴史・風土・慣習に根ざした語彙が豊富に掲載されている点であろう。しかしながら、本辞典には改善点が全くないわけではない。執筆していた当時には作業そのものに没頭してしまい気がつくことはなかった。しかし完成したものを手にとって改めて全体を見てみて、そのやや欠落している点に初めて気がついたのである。前述したとおり、本辞典の英語名のEncyclopedic Dictionary of Australian & New Zealand English and Cultureが示すように百科辞典

的な要素を多く取り入れた長所との両立が難しいとの事実を認めつつも、強いて挙げれば唯一の改善点としては、現代オーストラリアの社会生活に根ざした語彙が多く掲載されていない点であろう。筆者が欠落していると考えそれらの語彙を敢えて挙げると以下のようなものであるが、次回の改訂の際にはこれらを加えることを提言する所存である。以下典型的なものを列挙する。

- ・ annual leave (オーストラリアの年次有給休暇)
- ・ AQIS (Australian Quarantine and Inspection Serviceの略語で、「オーストラリア検疫検査サービス」)
- ・ citizenship test (市民権取得試験)
- ・ savoury pie (食事用のパイ)
- ・ school ball (高校最終学年の12年生のための学校主催のフォーマルパーティ)
- ・ slip, slop, slap (Slip on a shirt, slop on sunscreen and slap on a hat.の略語で「シャツを着て、日焼け止めを塗り、帽子をかぶろう。」)
- ・ snakebuster (ボランティアでヘビを駆除してくれる人)
- ・ street party (近所の人たちが集まる親睦パーティ)
- ・ TEE (tertiary entrance examinationの略語で、「大学入学資格試験」)
- ・ watering day (庭の散水ができる日)
- ・ WWOOF (Willing Workers On Organic Farmsの略語で「有機農場での労働を志望する人を受け入れる農家」)

## VI おわりに

『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』の編集作業に参加し特に印象に残ったことは、広義の意味でのオーストラリア英語即ちオーストラリアで一般に使われている英語の総体自体は、グローバル化とデジタル情報化の中で英米語あるいは世界の他の地域で使用されている英語との類似点は次第に大きくなっているという事実である。しかしながら、この類似へと向かう大きな流れの

一方で、他の地域の英語とは異なる狭義の意味でのオーストラリア英語、即ちオーストラリアでしか使用されない英語なるものが歴として存在しており、今後も存在し続けるだけでなくますますこの特徴は強まるであろうと痛感した点である。そしてその根拠は、1) オーストラリアが独自の歴史を有すること、2) オーストラリア大陸が他の地域とは異なり南半球に位置することで、季節も北半球とは逆であり生態系が根本的に異なり、その結果独自の動植物が存在すること、3) ヨーロッパ人によって建国された現在のオーストラリアには先住民族であるマオリ族を初めとするアボリジニの文化が色濃く残っておりその文化がオーストラリア英語に大きな影響を及ぼしていること、またシドニーオリンピックの開会式や閉会式の式典イベントでも記憶されているように、オーストラリアが国家政策として先住民族の文化を保護していく方針を採っていること、などである。従って新TOEICテストの音声テキストにオーストラリア英語が正式採用されたことは既に見届けたが、人的交流、防衛面での協力、TPP構想などによる貿易の拡大など、強化されつつある日豪関係を考え合わせると今後我々はますます「オーストラリア英語」に対する理解と認識を高めなければならないだろう。今回の本辞典の発刊はタイムリーにそのような世の機運に応えたものと言えるであろう。過去に主として英米語を中心にした英和辞典や和英辞典編纂に参加してきた筆者ではあるが、今回のオーストラリア英語辞典の編纂作業をきっかけに、オーストラリア英語の研究もしていきたいと思っている。またすでに確認したように、日本人にとって時差の少ないオーストラリアは交流するのに有利である。過去においては英米、特にアメリカ主体になりがちであった英語教育界ではあるが、今こそオーストラリアを再評価すべきではないかと思われる。英語教育の一環として日本国内の大学を始めとして中学校、高校なども海外に姉妹校を持ち交換学生制度などを設けていることはいいことといえよう。しかしその対象地域は英米が中心であった。最近増えつつあるようでは

あるが、今後オーストラリア国内の学校と姉妹校縁組を結ぶことを推奨したいものである。いずれにせよ、本辞典が発刊されたとしても、未だ日本におけるオーストラリア英語研究は十分とは言えない。またオーストラリア英語辞典を発刊しているのは数社に過ぎない。今後はもっと多くの出版社が切磋琢磨してオーストラリア英語辞典編集に参加することでその質も向上すると考えられる。ささやかな研究かもしれないが、今後筆者もその一助となることを念願し、可能ならばオーストラリア関係の学会に入会し特に前章で述べた「現代オーストラリア研究」などに挑戦したいと考えているところである。

### 参考文献等

- W.S.Ramson *Australian Aboriginal Words in English: Their Origin and Meaning* Oxford Reference 1992
- 須部宗生『英語の発想と表現』オセアニア出版社 1991
- 須部宗生「韓国における英語教育－全英連英語教育視察団参加報告－」静岡産業大学論集『経営と環境』第17巻 第2号 2011
- 沢田敬也 『オーストラリアの英語』オセアニア出版社 1986
- 横瀬弘幸 『オーストラリアおもしろ英語辞典』皆美社 1994
- 川野 寛 『オーストラリアの取説』リント 2010
- A.G.Mitchell & Arthur Delbridge *The Pronunciation of English in Australia* Angus and Robertson Ltd. 1965
- 森本 勉 『入門オージー・イングリッシュ』研究社 1986
- 早坂 信 『一杯のオーストラリア英語』NHK出版 2000
- 沢田敬也 『オーストラリア・ニュージーランド英語文化大辞典』オセアニア出版社 2011
- 長谷川瑞穂 『はじめての英語学』研究社 2006
- 読売新聞 2012年5月25日付